

展示室から

2024年 3月16日(土)~6月9日(日)

春の特別展「谷崎的『夫婦』のカタチ」

美しくもそれぞれに個性豊かな、谷崎作品のヒロインたち。そしてなぜか、彼女たちと男たちとは、「夫婦」であることが多い。

「痴人の愛」のナオミと譲治の、お伽噺のような家を舞台にした二人だけの「シンプルライフ」。「夢喰う虫」の「仮面夫婦」美佐子と要は、どこにでもいそうなふつ々の妻と夫にみえる。「春琴抄」の春琴と佐助の夫婦は、生涯「主従」の間柄を貫いた。「猫と庄造と二人のおんな」の庄造にとつて、二人の妻との関係は、手ごたえほどのものも無い幻のような……。

いかにも、彼らは夫婦である。が、そんな二人の関係は、婚姻制度に裏づけられた良識の型にはめられた世間並みの夫婦のかたちにはおさまりきれない、風変わりなもののようにみえる。夫婦の間に血縁のつながりが絡むのを恐れて子を生むことを拒み、「他人行儀」で「多少の間隙」のある「妻と夫であって、そうでない」という、いわば「仮家の夫婦」を理想としていた谷崎。そんな谷崎じしんの夫婦観や結婚観も、その作品の夫婦の有り様と関わっているのだろうか。

谷崎が描く「夫婦のカタチ」のウラには、どんな事情や背景があるのか。谷崎やその周辺の現実の夫婦関係も絡めながら、読み解いた。



最後の妻松子宛の電報



最初の妻千代との結婚記念
1915年5月

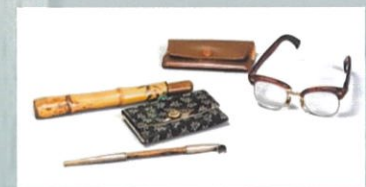


夏の特設展

「文豪の愛着」

「谷崎が愛した小物たち」

身に着け、また肌を接しながら、使いこんできたモノたちには、おのずと、その人の体温が伝わっていきものだろう。趣味嗜好や価値観が色濃く映し出され、人とのつながり、身体的な特徴まで物語ってくれる。



キセル、煙草入れ、眼鏡

芦屋市谷崎潤一郎記念館には、文豪谷崎が生前愛用していた数多くの品々が所蔵されている。「商売道具」の文具はもとより、帽子や眼鏡・カメラ、著書の検印にも使われたこだわりの印鑑、希代の食いしん坊谷崎の食欲を最後まで支えた「入れ歯」まで……。



谷崎遺愛の多種多様な小物たちから、在りし日の文豪の愛着、その（手触り・肌ざわり・息づかい）をよみがえらせた。

2024年 12月14日(土)~2025年 3月9日(日)

冬の特設展 「幻想・怪奇・グロテスクー暗黒と流血の谷崎潤一郎ー」

谷崎潤一郎といえば、女性美を描き続けた「美の作家」というイメージが強いのではないだろうか。

だが、大正時代を中心に、昭和初期くらいまでの谷崎には、幻想や怪奇に彩られ、時にグロテスクな様相すら漂わせる作品も少なくない。

人魚や魔術師を主題にした幻想的な物語、討ちとられた首に魅入られた武将が主人公の時代小説、悪女が仕掛ける血みどろの戯曲、人の顔をした腫物の笑いが映画の中で不気味に輝くホラータッチのストーリー……。

そんな谷崎の一面、「暗黒と流血の文豪」としての顔に焦点をあてた。



『武州公秘話』挿絵

春 ロビーパネル展 「笑う、谷崎」

写真の中の谷崎潤一郎の顔は、「面白くなさそう」「仏頂面」「苦虫をかみ潰したような」「渋面、はたまた、頑固そうな強面（こわもて）、といった印象が強いのではないか。だが、そんな谷崎も、柔和な笑顔やほじけたような笑いをみせることがあるのだ。綺麗な女性と一緒にいる時、華やかなお祝いの場で、親しい人たちとともに……。そして、子や孫たちにみせる表情は、何ともいえない情愛に満ちている。近寄りたがたい「文豪谷崎」のイメージからは意外な、「笑う谷崎」のポートレートピックアップし、展示してみた。



40歳頃の笑顔



70歳頃の笑い

2024年 9月14日(土)~12月8日(日)

秋の特別展 「モノクロームの繚乱ー色彩の谷崎潤一郎ー」

昨今のAI、その技術革新はめざましく、さまざまな方面に広がりを見せている。「モノクロ写真への彩色」も、その一つだろう。コンピューターが、白と黒との濃淡・風合いの微妙な差から、本来の色合いを割り出し彩色する。その「AIによる彩色」に、経験豊かな「写真のプロ」の職人技が、調整をほどこしていく。すると、モノクロームの永い眠りについてきた彩りの数々が、たしかにリアリティーをもって、鮮やかによみがえってくるのだ。

AIと人間の技術とによる「色彩の魔法」。その魔法を、館所蔵のモノクロ写真にかけてみると、どうなるか。

人生の節目ごとにみせる文豪の表情が色づく、はたして印象はどう変わるのだろうか。谷崎をとりまく女性たちの肌合いや眼差し、そして身につけていたそのキモノの色々にも興味は尽きない。「細雪」の時代の六甲山は、傑作の舞台となった芦屋の街並みを抱きながら、作中の叙述そのままに明るく輝く。その主人公たちのいで立ちがまた、予想どおりのきらびやかさ……。

モノクロームの封印を解き放たれた色彩が、新たに染め上げる文豪谷崎とその作品世界。

松子 打出の家の前で1934年頃



原版モノクロ写真

調整済彩色写真



2024.4-2025.3

芦屋市谷崎潤一郎記念館

